

VI) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
イネ	いもち病	葉いもち 平年並、 穂いもち 平年並	葉いもち やや少、 穂いもち やや少	葉いもちの初発生は6月14日、全般発生期は6月第6半旬といずれも平年並みであった。葉いもちの病勢は発生初期から緩慢で、梅雨明け以降、急速に衰えた。7月下旬の巡回調査による発生圃場率は21.4%（平年29.0%）、発病株率が8.9%（平年15.7%）となり、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。穂いもちの初発は8月1日と平年並みであった。病勢は緩慢で8月下旬の発生圃場率は15.9%（平年23.6%）、発病穂率は0.2%（平年2.0%）となり、全般の発生量はやや少なかった。	6月には第2～5半旬まで感染好適日が県内各地で出現し、アメダス観測15地点におけるBLASTAMによる出現回数は18回（平年19.9回）とほぼ平年並みとなった。7月も前半は感染好適日が出現したが、梅雨明け（17日）以降8月下旬まで気温が高く、降雨頻度が低く経過したため感染が抑制されたものと考えられる。なお、7月の感染好適日の出現回数は12回（平年28.9回）、8月は5回（平年13.2回）であった。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ薬剤散布が行われた。
	紋枯病	平年並	少ない	初発生は平年並みの6月14日に認められた。病勢進展は極めて緩慢で、発病株率は低いまま経過した。例年、上位進展が活発な極早生種栽培圃場でも、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ圃場はあまり認められなかった。全般の発生は平年に比べて少なかった。	栽培期間を通して全般に気温は高く経過したが、降雨頻度は少なかった。また、中干し等の水管理が徹底されたことから、株間湿度が低下し、全般にわたって病勢進展が緩慢になったものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	縞葉枯病	—	平年並	初発生は6月15日にコシヒカリで認められた。その後、ゆうれい症状を呈する発病株が認められたが、1圃場当たりの発病株数は数株程度であった。巡回調査における発生圃場率は1%で、22年ぶりに広域的多発生となったH20年度の16.9%と比較すると顕著に低下し、全般の発生量は平年並みとなった。また、再生稲における発病株率も前年とほぼ同じ0.2%であった。	4～8月に捕獲されたヒメトビウンカの保毒虫率は0.7%で、本病の発生量がやや多かったH21年度の6.2%と比較して低かった。また、ヒメトビウンカの越冬世代～第1世代の発生量が平年並みに留まったことから、本病の発生量は平年並みになったものと考えられる。	H20年度あるいはH21年度に、縞葉枯病が多発生した地域では、箱施薬剤等による媒介虫のヒメトビウンカに対する防除が行われた。
	セジロウンカ	遅い	やや多い	予察灯での初飛来は平年に比べて遅い7月2日に認められたが、その後の飛来は平年並みで経過した。現地圃場の成幼虫の発生は7月下旬に25株当り虫数が72.9頭、発生圃場率が84.6%となり、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	飛来量が平年並みであったこと、7月中旬以降平均気温が高く降水量も少なかったため、全般の発生量は平年に比べてやや多くなったものと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。また、出穂時に穂いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	トビイロウンカ	早い	平年並	予察灯での初飛来は平年に比べて早い7月6日に認められたが、その後の飛来は平年に比べてやや少なくて経過した。現地圃場の成幼虫の発生は8月下旬に25株当り虫数が2.0頭、発生圃場率が13.2%となり、全般の発生量はほぼ平年並みであった。	飛来量が平年に比べてやや少なかったこと、7月中旬以降平均気温が高く降水量も少なかったため、全般の発生量は平年並みになったものと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。また、出穂時に穂いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	斑点米カメムシ類	平年並	やや多い	6月下旬の圃場周辺雑草地でのすくい取り調査では、カメムシ類合計で発生量は3.4頭/10回振、圃場率33%（平年1.8頭・41%）で発生量は平年に比べてやや多い。7月下旬の極早生品種出穂時の調査では、発生量は7.9頭/20回振・圃場率86.8%（平年6.2頭・72.0%）で平年に比べてやや多い。全般の発生量は平年に比べてやや多く経過した。主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。	昨年の発生量は平年並みで越冬量も平年並みであったことに加え、7月中旬以降平均気温が高く降水量も少なかったため、全般の発生量が平年に比べてやや多くなったものと推察される。	7月30日に注意報を発表、発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。カメムシ防除を兼ねた長期残効型箱剤の施用面積も拡大している。
ムギ	さび病	—	少ない	オオムギ、コムギとも発生を確認できなかった。	—	本病を対象とした防除は特に行われなかった。
	赤かび病	—	やや少ない	5月下旬における発生量は発生圃場率が2.9%（平年3.1%）、発病穂率は0.02%（平年0.08%）と平年に比べてやや少なかった。	4月～5月に降水量が少なく本病の感染に抑制的であったものと考えられる。	ムギの種類に応じて出穂期以降、薬剤散布が実施された。

	うどんこ病	—	少ない	生育後半になって発生を認め全般の発生量は平年に比べて少なかった。	近年発生が少ないことから、伝染源量が少ないものと考えられる。	他の病害との同時防除が行われた。
	黒節病	—	多い	オオムギで発生が多く、生育が抑制された株や節に発病した圃場が多く見られた。また、穂焼症状を呈した圃場もあった。	1～2月は比較的低温であったが、3月は寒暖の変動が大きく発生を助長したものと考えられる。	本病を対象とした防除は特に行われなかった。
ダイズ	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は9月下旬までやや少なかった。圃場での幼虫の発生はやや遅い9月上旬からみられた。9月末の発生量はやや少なかった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なかったものと思われる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
ナシ	黒斑病	遅い	やや少ない	発生量は、6月下旬まではほぼ平年並みで推移したが、7月下旬以降は平年と比べてやや少なく推移した。	近年、発生量が少ない傾向が続いているため、越冬菌量が少なかったと考えられる。	袋がけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	遅い	平年並	発生量は、6月下旬までは平年と比べてやや少なく推移したが、7月下旬以降は平年並みで推移した。	近年、発生量のやや多い傾向が続いているが、4～5月の降水量が少なかったため、発生量が平年並みとなったと考えられる。	開花期から袋かけ期を中心に薬剤防除が行われた。
	ナシヒメシンクイ	平年並	平年並	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並み。誘殺数はすべての世代で平年並みとなった。果実の被害は全般には平年並みであった。	3月中下旬は気温が低かったが、4月は気温が高く、越冬世代成虫の発生時期は平年並みとなった。越冬量は平年並みで、6月の気温は低く、7月以降高く推移したため発生量は平年並みになったと思われる。また、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	モモシンクイガ	平年並	平年並	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期は平年並みであった。誘殺数、果実被害は全般に平年並みであった。	前年の発生は平年並みで、越冬世代成虫の発生量も平年並みと考えられる。春先の気温が高く推移したため発生時期は平年並みとなった。また、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなった。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。
	ハマキムシ類	平年並	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、平年並みであった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	3月は気温が低かったものの4月の気温はやや高く、越冬世代の発生時期は平年並みとなった。その後、6月の気温は低く、7月以降高く推移したが、全体の発生量はやや少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	やや多い	ハダニ類の発生量は4月下旬の花叢への寄生率は平年並みであったが、その後、5月から8月に発生がやや多くなった。全般の発生量はやや多くなった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なかったが、4月下旬にクワオオハダニの花叢への寄生がみられ平年並みとなった。その後、5月の気温が高く、発生量が一時増加した。その後、降雨が少なくなり、発生量はやや多く推移した。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。
	クワコナカイガラムシ	—	やや少ない	全般の発生量はやや少なかった。	—	防虫果袋が使用された。
	アブラムシ類	平年並	平年並	4月下旬、5月下旬の寄生梢率、寄生程度はやや少なくなった。その後、6月には平年並みとなった。全般の発生量は平年並みであった。	4月中旬の気温がやや高く経過したため、発生時期は平年並みとなったが、4月、5月下旬の発生がやや少なかった。その後、高温乾燥により平年並みとなった。全体の発生量も平年並みに推移したものと考えられる。	5～6月に薬剤散布が行われた。
カキ	炭疽病	平年並	平年並	7月下旬に果実での発病が確認されたが、その後病勢は進展せず、全般の発生量は平年並みであった。	前年の発生量から、伝染源は多いと予想されたが、降水量が梅雨時期を除いて少なかったため、全般の発生量は平年並みとなったと考えられる。	梅雨時期と8月下旬～9月を中心に薬剤散布が行われた。

	うどんこ病	早い	やや多い	梅雨明けまでは発生量が平年と比べて多く推移したが、その後、病勢は鈍化した。全般の発生量は平年と比べてやや多くなった。	昨年炭疽病を主体とした防除体系に変更したことが、梅雨明けまでの多発した要因と考えられる。8月末のうどんこ病を対象とした防除によって、その後の発生が抑えられたと考えられる。	8月下旬～9月に薬剤散布が行われた。
	円星落葉病	やや遅い	やや少ない	一部多発園も見られたが、全般の発生量は平年と比べてやや少なかった。	近年、発生量が少ない傾向が続いているため、越冬菌量が少なかったことと、薬剤防除が徹底されたためと考えられる。	5月～7月に薬剤散布が行われた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の発生量、被害とも平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	カメムシ類	やや早い	やや多い	フェロモントラップでは4月18日に、予察灯では5月12日から誘殺された。その後、7月1半旬から誘殺数が増加し、平年より多く推移したが7月5半旬には平年並みになり、その後も平年並みに推移した。	昨年はヒノキ毬果が多くカメムシの越冬量は多いと考えられた。本年はヒノキの花粉飛散量から毬果はやや少ないと考えられ、圃場への飛来時期は早く、飛来量が多いと予測されたが、発生量の多い期間は7月上旬から下旬までで長くは続かなかった。	フェロモントラップ、予察灯の誘殺数から7月12日に注意報を発表し、7月中旬から8月中旬まで定期的に薬剤による防除が行われた。
	カキクダアザミウマ	平年並	平年並	5月8日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第3半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年並みであった。果実被害は7月中旬からみられたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量はやや少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
夏秋キャベツ	黒腐病	—	平年並	巡回調査地点での発生量は生育期間全般を通じて平年並みであった。	食葉性害虫等による葉の傷害も少なく、感染機会は総じて限定的であったものと推察された。また、近年の傾向として発生量がやや少ない～少ないことから、伝染源量の減少も発生の抑制に繋がっているものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	全般の発生量は平年並であった。	—	薬剤による防除が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	—	定植時の粒剤施用または灌注（土壌またはセルトレイ）と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は9月下旬までやや少なかった。圃場での幼虫の発生は9月中旬からみられ、9月下旬には寄生株率が3.6%（平年8.4%）となった。全般の発生量はやや少なかった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なかったものと思われる。	定植時の粒剤施用または灌注（土壌またはセルトレイ）と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
冬キャベツ	黒腐病	—	やや少ない	発生圃場は僅かで、発病程度もやや低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生量がやや少ない～少ないことから、伝染源量が減少し、発生が抑制傾向にあるものと考えられる。	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	県内各地で発生がみられ、全般の発生量は平年並であった。	—	薬剤による防除が行われた。
	コナガ	—	少ない	幼虫の発生量は全般に少なかった。	—	定植時の粒剤施用または灌注（土壌またはセルトレイ）と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は9月下旬までやや少なかった。圃場での幼虫の発生は9月中旬からみられ、9月下旬には寄生株率が3.6%（平年8.4%）となった。全般の発生量はやや少なかった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量はやや少なかったものと思われる。	定植時の粒剤施用または灌注（土壌またはセルトレイ）と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。

タマネギ	白色疫病	—	平年並	3月には県内各地で発生がみられたが、全般の発生量は平年並であった。4月以降は、例年どおり気温の上昇に伴い病勢は鈍化し、4月下旬にはほぼ終息した。	—	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	べと病	—	やや少ない	3月下旬における越年罹病株の発生量は6.2株/1万株と平年と比べてやや多くなった。しかし、その後、二次感染株の発生が増加せず、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	4～5月の降水量が少ない傾向であったことが、二次感染株の発生を抑制したと考えられる。	越年罹病株の抜き取りや発生に応じた薬剤散布が行われた。
	さび病	—	平年並	収穫期に発生がみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
イチゴ	灰色かび病	—	やや多い	県内各地で発生が認められ、発病程度のやや高い圃場も散見され、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	—	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	少ない	促成、半促成栽培における発生量は全般に少なかった。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数は平年並みであったが、定植時に本種に卓効の薬剤が使用されたため、発生量は少なくなったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。